

Title	内陣仕切り研究のための基礎的考察 一：研究史の概観を中心に
Sub Title	Preliminary study on chancel screen 1 : a survey of its literatures
Author	山本, 成生(Yamamoto, Naruo)
Publisher	慶應義塾大学言語文化研究所
Publication year	2025
Jtitle	慶應義塾大学言語文化研究所紀要 (Reports of the Keio Institute of Cultural and Linguistic Studies). No.56 (2025. 3) ,p.381- 401
JaLC DOI	10.14991/005.00000056-0381
Abstract	「内陣仕切り」は、西方教会の聖堂建築においておもに内陣と身廊の間に置かれる構築物である。建築史・美術史を中心とする従来の研究は、それを教会堂の建築における「不要な付加物」、または一般信徒と特権的な聖職者を分離する社会的障壁とみなし、不当な評価を与えてきた。しかしながら、欧米における近年の諸研究は内陣仕切りの多様な価値や機能に着目し、意義深い成果を産んでいる。これを踏まえ、本稿はおもに十九世紀から現代にいたる諸研究を概観し、研究者たちの問題意識や方法論の整理をおこなっている。
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00069467-00000056-0381

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

内陣仕切り研究のための基礎的考察 一

——研究史の概観を中心に——

山 本 成 生

要 旨

「内陣仕切り」は、西方教会の聖堂建築においておもに内陣と身廊の間に置かれる構築物である。建築史・美術史を中心とする従来の研究は、それを教会堂の建築における「不要な付加物」、または一般信徒と特権的な聖職者を分離する社会的障壁とみなし、不当な評価を与えてきた。しかしながら、欧米における近年の諸研究は内陣仕切りの多様な価値や機能に着目し、意義深い成果を産んでいる。これを踏まえ、本稿はおもに十九世紀から現代にいたる諸研究を概観し、研究者たちの問題意識や方法論の整理をおこなっている。

はつめい

ここで「内陣仕切り」と呼ぶものは、西方教会の聖堂建築において、おもに内陣と身廊の間に置かれる構築物である。⁽¹⁾それは、この二つの領域を空間的・物理的に分離する——上方は空いているため完全にはないが——だけでなく、聖域たる内陣を占有する聖職者と身廊にいる一般信徒を分ける一種の社会的境界線でもあった。内陣仕切りの規模や形状は様々であるが、いずれも身廊側から内陣——ここでは主祭壇でもっとも重要な祭儀がおこなわれている——への視界を見えづらくする、ないしは完全に遮る効果を有する。内陣仕切りは初期キリスト教時代の聖堂建築にもみられるが、とりわけゴシック期以降の西ヨーロッパの教会堂で広く設置されていた(図1を参照)。だが、十六世紀に宗教改革が起こり、プロテスタントの影響を受けて一般信徒の典礼への積極的な参加がカトリックでも求められるようになる⁽²⁾と、内陣仕切りは聖職者の特権性の象徴であり、かつ礼拝という実際のな面においても不適切なものとして批難されるようになった。よって多くの教会でそれは破壊・撤去されるか、あるいは身廊の入口付近など他の場所に移築され、パイプオルガンの土台など本来とは異なる用途に転用された。今日においては、ドイツのナウムブルク大聖堂やフランスのアルビ大聖堂、あるいはイギリスのイースト・アングリアの諸教会の事例——近代における疑似中世風建築を含む——などの例外を除いて、内陣仕切りはほとんど存在しない。

以上は、「内陣仕切り」の定義ないしは現状での理解として、キリスト教や西洋建築史・美術史に関わる標準的な百科事典と概説書の内容をまとめたものである。一見すると問題がないように思われるが、この文面には多くの重大な瑕疵が



図1 17世紀初頭の低地地方の教会（詳細不明）における内陣仕切り。
ヘンドリック・ファン・ステーンウェイク2世の絵画より（1602年頃。部分）
Brussels, Musée Royaux des Beaux-Arts de Belgique. Inv.: 1533

存在する。本論はそれらを正し、内陣仕切りの多様な位置付けを述べつつ、それに積極的な評価を与えることを目的としている。ただし、本題に入る前に、内陣仕切りがいかに過小評価——あるいはほぼ無視——されているかについて、述べておく必要がある。

各種の学問分野に関わるいわゆる「大百科事典」において、内陣仕切りに割かれる紙幅はきわめて乏しく、単巻ものにしたっては項目自体が存在しないことが多い。⁽³⁾ 西洋建築史・美術史の概説書におけるその扱いは、特に悲惨であると言わざるを得ない。そこではロマネスクやゴシック聖堂の偉大な遺産である穹窿や列柱、ステンドグラス、装飾的壁面が饒舌に語られ、またその背後にある建築理論や美学が誇らしげに説明される一方で、豊かな装飾が施され、中世の人々にとって近い存在であった内陣仕切りについては、まったくといっていいほど触れられていないからである。⁽⁴⁾ そしてこれは我が国の学界においてとりわけ特徴的な現象であると思われるが、西洋建築史・美術史において優れた研究者が多数いるにもかかわらず、内陣仕切りを専門としている者は皆無であり、個別の論文も数えるくらいしか存在しないのである。⁽⁵⁾

内陣仕切りに対するこうした等閑視には、どのような背景があるのであろうか。むろん、先に述べたように内陣仕切りの多くは近世以降に破壊・撤去されているため、かれらが調査対象とする「実物」が（わかりやすいかたちで）現存していない点が、その理由としてまず挙げられるであろう。しかしながら、根本的な原因は別のところにあるように思われる。そのヒントは、十九世紀フランスの建築家・建築史家として著名なウジェーヌ・エマニュエル・ヴィオレール・デュク（一八一四—一八七九年）の言説のなかに存在する。彼のその主著である『中世フランス建築事典』（一八五四—一八六八年）の「内陣仕切り」*jubé*の項目において、次のように語っている。

これは注意すべきことだが、十二世紀末から十三世紀初頭にかけて建築が始まった著名な大聖堂、すなわちノワイヨン、パリ、シャルトル、ブルジュ、ランス、アミアン、ルーアンなどは、当初から内陣仕切り、または内陣柵の設置を想定していたわけではなかった。司教や参事会が大聖堂の内陣前に仕切りを建てさせたのは、ようやく十三世紀半ばになってからのことである。……この間、聖王ルイは王代官制度や高等法院の導入により、執拗なまでに司教の権力を削いでいった。司教はもはや、靈的な裁治権や自身の土地での領主権のみを行使し得る存在となつてしまつた。十三世紀初頭において、彼らは「あらゆる種類の支配権の源、すなわち司教座を有する教会」を建てることをまだ夢想していたが、現実的にはそれはもう不可能であつた。そこにあるのはただの「司教がいる教会」であり、彼らは参事会員とともに、巨大な聖域「内陣」に引き籠もり、宗教的・政治的な空想に浸つていたのである。⁽⁶⁾

この叙述には、二つの美的判断¹¹歴史認識が存在する。まず一つ目は、教会建築学に関わるものである。すなわち、内陣仕切りはゴシック大聖堂の当初の、あるいは本質的な建築方針に含まれるものではなく、「ゴシックの美学」という観点からすると「余計な付加物」にすぎないという考えである。二つ目は、内陣仕切りが導入された歴史的経緯や当事者の意図についてである。周知の通り、王権の力が脆弱であつたカペー朝初期のフランスでは、司教を始めとする教会人が秩序の維持・形成に大きな役割を果たしていた（ジェラルド・ド・カンブレールの「三身分論」や「神の平和」運動を想起せよ）。しかしながら、十二世紀後半以降、いわゆる「カペー王権の巻き返し」が始まり、俗権に対する司教の優位性は揺らいでいった。ヴィオレ＝ル＝デュクはこれを念頭に置き、内陣仕切りの設置は権力の弱体化を強いられていた聖職者たちの「虚しい抵抗」であつたと述べているのである。⁽⁷⁾そしてこの見方は彼に限定されず、内陣仕切りに関する一種の公式見解

として、建築史家・美術史家の間で広く共有されているように思われる。⁽⁸⁾

要するに、西洋建築史・美術史——とりわけ我が国の学界における——を中心とした研究史での内陣仕切りの等閑視は、単なる偶然または学問分野に特有の方法論の問題のみに起因するのではなく、それに対するある種のネガティブな価値観に基づいているといえるのである。こうした偏見が、内陣仕切りが実際に有していた多様な価値・機能を単純化してしまい、その研究の可能性を狭めていることは言うまでもない。本論はこの状況を改善するためのささやか試みであるが、基礎的な事項を整理するだけでも多くの紙幅を必要とする。よって、本稿では研究史の動向に絞って考察をおこなう。内陣仕切りの名称の問題や概史、形態・様式、使用用途や効果などについては別稿に譲る。

一 古典的諸研究——二十世紀半ばまで

内陣仕切り研究の嚆矢となるのは、ジャン・バティスト・ティエール（一六三六—一七〇三年）による『諸聖堂の主祭壇・内陣仕切り・内陣囲いに関する教会史論攷』（一六八八年）という著作である。⁽⁹⁾ 著者はシャルトルに生まれ、パリ大学で神学を修めた後、コレージュの教師や教区司祭を務めた人物である。彼は多作な碩学であり、キリスト教関連の様々な話題——特に庶民的な事項——を中心として、約三〇冊の著作を残している。本書は全二五章からなり、内陣仕切りの名称や起源、形態などの基本的な事項を確認した後に、フランス各地の教会におけるその利用法が述べられている。なお、序文には本書の執筆動機が記されているが、興味深い内容が含まれているため、以下に引用しよう。

最近では多くの教会に内陣仕切りを取り壊す自由が与えられているが、それはその利用法を十分に理解していないか、あるいは教会における古来の伝統に対する愛情が乏しいかの、いずれかの理由によるものである。知識や情熱の欠如により、内陣仕切りに関する低俗な考えが広まっている。すなわち、それは無用な装飾物であり、規範からの逸脱であり、聖なる祭壇に向かう信徒たちの視界を奪う不愉快な突起物であるという意見である。さらにそれは、我々のもつとも崇高なる神秘について、自由に観想に耽ることを妨げるものでもあるという……。内陣仕切りを破壊し、取り除こうと躍起になっている人々を、私は「内陣仕切り破壊論者^{アンボクラスト}」と呼んでいる……⁽¹⁰⁾。

ティエールは数多くの文献に依拠して論を進めているが、その記述に誤謬や当時において流布していた俗説が含まれていることは否めない。とはいえ、それらも内陣仕切りに対する批判が高まっていた近世フランスの雰囲気伝える貴重な記録であるといえる。

内陣仕切りの研究史について次に述べておくべきことは、地方史研究の成果である。ヨーロッパ各国の諸地方では少なくとも十九世紀以来、その土地に関する豊かな学知が蓄積されており、当地の内陣仕切りに関するものも少なくない。その担い手はおおむね地方アカデミーの会員であるが、そこには大学教授や文書館職員などの職業的研究者のみならず、地元教会の聖職者や歴史・古物愛好家などアマチュアの学者も含まれている。よって研究の質において幅があることは否めないが、それらは現地の内陣仕切りについての一次的な知識を提供するだけではなく、現在は失われた情報源に基づく場合もあり、きわめて貴重な存在である。さらにそうした地方史研究には、内陣仕切りに対する地元の人々の想いを伝える歴史記録としての側面があるともいえるであろう⁽¹¹⁾。ただし、こうした成果は、現地でのみ流通する地方アカデミーの機

関誌や小冊子のかたちで公表されており、情報化が進んだ今日においても参照が困難な場合が多い。

特定の地域ないしは国における内陣仕切りを総合的に扱った研究は、イギリスでもっとも早く登場した。⁽¹²⁾ オーガスタス・ウエルビー・ピュージン（一八二二—一八五二年）は前述のヴィオレル・デュクと同時代のイギリスの建築家・建築史家であるが、一八五一年に内陣仕切りに関する著作を出版している。⁽¹³⁾ 彼はその冒頭において「私がこれから扱う主題『内陣仕切り』は、人々が常識的に考えるよりもはるかに重要なものである。それは方立や横断梁など建築上の細部の事項に限定されず、教会における規律——あるいは信仰自体——の大原則に関わるものである。これは古来の荘厳さや威厳の再生・復興のみならず、いまだ現存する内陣仕切りの保全を望む者すべてに関連する問題なのである」と述べ、現在に通じる内陣仕切り研究の意義を力説している。⁽¹⁴⁾ ただし、いくつかの詳細な図版は含まれるが、本書はイタリア、スペイン、フランス、低地地方、そしてイギリスの諸教会・修道院における内陣仕切りを簡単に紹介しているにすぎず、今日においては学術的な価値は乏しいといえる。むしろ興味深いのは、十六世紀以降の「内陣仕切り破壊運動」について述べている箇所である。彼は執筆当時（十九世紀半ばのイギリス）の風潮を、次のように評している。

仕切り壁や横断梁、あるいは「そこに掲げられた」十字架や「南北方向の」水平線を極端に嫌うこと。カトリック教会が古より受け継いだ第一級の芸術作品を貶め、墮落した現代の事物を嬉々として称讃すること。ロウソクや燭台などへの無節操な消費欲と、それらを所構わず飾ること。聖務日課においては、快活で楽しく甘ったるい楽曲など、大きな興奮をもたらすものを求め、単旋律の厳肅なる聖歌には耐え難い苦痛を感じてしまう。ミサでは説教壇のすぐそばに座り、主祭壇とじかに向き合わなければ気が済まない。かくして教会はあたかも魚市場のような雰囲気となり、

足元には温水パイプ、近くにガス管、背中にはストーヴがあれば、寒く陰気なイングランドにおいてもイタリアのような空気が味わえるのだそうだ。あるいはウェストミンスターの薄暗い丸天井や新しい内陣仕切りの忌々しき列柱「鉄柵のことか」でほとんど奪われかけた靈性も、呼び戻すことができるという。⁽¹⁵⁾

建築家ビュージンはイギリスにおけるゴシック・リヴァイヴアルの中心的な担い手であるとされるが、その原動力には彼が（プロテスタントからの改宗）カトリック教徒であったことが挙げられる。⁽¹⁶⁾ 上記のやや扇動的な物言いから、内陣仕切りは単なる研究対象に留まらず、彼の信仰や道徳に関わる重要な参照軸、すなわちアイデンティティを構成する一要素であったことが窺えるであろう。

さて、イギリスではビュージン以降も内陣仕切りに関する研究が蓄積され、二十世紀初頭にはより包括的で高度な三つの研究がなされた。まず一つ目は、中世イギリス美術を専門とする建築・美術史家のフランシス・ボンド（一八五二—一九一八年）によるものである。⁽¹⁷⁾ 彼の関心は、イギリスにおける内陣仕切りの網羅的な検討とその類型化にあった。よって、内陣仕切りの歴史に関する一般的な説明は最小限に押えられ、それが多様な形態で存在する教区教会の事例が中心的に検討されている。二つ目は、建築家であるフレデリック・ブライ・ボンド（一八六四—一九四五年）がベネディクト会修道士で殉教史研究者のピーダ・カム（一八六四—一九四二年）と共著で出版したものである。⁽¹⁸⁾ 本書は二巻本であり、ボンドによる第一巻はユダヤ、ギリシア、ローマ等の古代の宗教建築から始まり、中世を経て内陣仕切りへの批判が高まる宗教改革後までの歴史が、イギリスの事例を交えつつ詳述される。一方、カムによる第二巻では、内陣仕切りに付された個々の装飾が論じられている。そして三つ目は、エイマー・ヴァランス（一八六二—一九四三年）によるものである。⁽¹⁹⁾

この人物はウィリアム・モリスの友人・伝記作家として知られているが、彼自身も芸術家・美術史家であり、一九三六年と（死後の）一九四七年に内陣仕切りに関する著作を出版している。

これらはいずれもイギリスにおける内陣仕切りの総合的な調査を目指したものであるが、他のヨーロッパ諸国と同様に、中近世のイギリスには司教座聖堂、教区教会、修道院を始めたとした教会建築が多数存在しており、それらがすべて網羅されているわけではない。⁽²⁰⁾ また、内陣仕切りがもつ様々な宗教的・社会的機能に関しては、十分に論じられてはいない。とはいえ、これらの諸研究は（その後に失われたものを含めて）内陣仕切りに関する基本的なデータベースを形成しており、後述する近年の多面的な研究の土台となっているのである。⁽²¹⁾

二 停滞から革新へ——二十世紀後半以降の新潮流

一般信徒のより積極的な典礼への関与が叫ばれていた第二ヴァティカン公会議（一九六二—一九六五年）の影響下にあった二十世紀後半において、内陣仕切り研究は停滞に陥っていたといえる。むしろ、地方史研究や事典の項目、小冊子、そして学位論文の題材として個々の内陣仕切りを扱ったものは散見されるが、国あるいは地域レベルの視野でそれを十分に論じたものはきわめて少ない。⁽²²⁾ こうしたなかで例外的ともいえる貴重な三つの研究を確認しておこう。

まず一つ目は、ベルギーの美術史家であるヤン・カレル・ステッペ（一九一八—二〇〇九年）による一九五二年の著作である。⁽²³⁾ これは中世後期から近世にかけての低地地方の諸教会を対象とした浩瀚な著作である。周知の通り、この地域の特に関心は近世以降、新教勢力の牙城となっていた。一般的に、プロテスタント化された教会の内陣仕切りは破壊さ

れるか、よくても別の場所に移築・転用されてしまったとされる。ステツペは地方史研究を幅広く蒐集・検討することである——刊行年を踏まえるとそれは驚異的な仕事といえる——その実像を描こうとしている。巻末に付された年表からは、現存こそしていないものの十六・十七世紀には多くの教会で内陣仕切りがあらたに建造されていたことがわかる。そして、そこには後期ルネサンス・バロック様式の豊かな装飾が施されており、また冒頭で紹介した絵画(図1)からも窺えるように、内陣仕切りは当時の人々の信仰生活のなかに穏やかに溶け込んでいたのであった。⁽²⁴⁾二つ目は、アメリカの美術史家であるマーシャ・ホール(一九三五年生)が一九七〇年代に発表した一連の論文からなる。⁽²⁵⁾これらはイタリアを扱ったものであるが、同国には現存するゴシック期の内陣仕切りとして最古の事例(ヴェツツォラーノ修道院、一一八九年)があるものの、その他の事例はほとんど残っておらず、司教座聖堂など格式ある教会では内陣仕切りはそもそも存在していなかったとされる。こうしたことから、イタリアを対象とする内陣仕切り研究は——イタリア人自身によるものも含めて——ほとんどおこなわれていなかったようである。ホールはフィレンツェのサンタ・クロチエ教会とサンタ・マリア・ノヴェッラ教会という托鉢修道会の教会に注目する。これらの教会では、ジョルジョ・ヴァザーリ(一五一一—一五七四年)のもとで一五六五年に大規模な改装工事がなされ、その際、中世以来の内陣仕切りは破棄されてしまった。ホールは様々な資料によりそれらの復元を試みつつ、イタリアにおける内陣仕切りの特徴を考察している。そして三つ目は、ドイツのローマ・カトリック典礼学者として名高いクラウス・ガンバー(一九一九—一九八九年)が一九八四年に発表した論文である。⁽²⁶⁾この論文は、ドイツの諸教会・修道院の内陣仕切りを網羅的に調査したものではなく、また分析手法も建築史・美術史の学者のものにくらべるとやや物足りない面があるが、近世以降の銅版画で描かれる内陣仕切りがつねに教会の礼拝と結びついている点など、典礼学者ならではの貴重な視点を提供してくれる。⁽²⁷⁾

さて、二十世紀末から今世紀になると、内陣仕切り研究の状況は一転する。成果物や研究者の数としては依然として少数であるが、きわめて優れたモノグラフが現われ、また内陣仕切りをより広い文脈で検討するもの——シンポジウムや論文集など学際的共同研究である場合が多い——も登場するようになったからである。それらをすべて紹介する紙幅の余裕はないため、ここでは代表的なもののみを述べよう。

中世のドイツ語圏を調査対象とするモニカ・シユメルツァーのものは、単なる網羅的な調査ではなく、厳格かつ明確な方法論に基づいており、内陣仕切り研究の水準を一段高めたものと評価できよう。⁽²⁸⁾ また内陣仕切りに特化した研究ではないが、近世フランスを対象としたマチュー・ルルスの研究も注目⁽²⁹⁾に値する。専門家以外にはよく知られていないことだが、十七・十八世紀のフランスでは教会堂内部の改装・改築がさかんにおこなわれ、結果として中世以来の景観は大きな被害に遭った（その規模は、宗教戦争やフランス革命期のそれを上回るものであったという）。近世における「内陣仕切り破壊運動」は単独ではなく、この文脈において論じなければならないが、ルルスの研究はそのための確かな基盤を提供してくれる。

二十世紀前半にすでに基礎的な研究蓄積が存在するイギリスでは、内陣仕切りに関わるより発展的な研究がおこなわれている。例えばイースト・アングリアに関しては、ポール・ピンスキーの指導のもとで、ハミルトン・カー研究院（フィッツウィリアム美術館の一部門）による大規模な研究プロジェクトが二〇〇九年に立ち上げられている。これは同地方に現存する内陣仕切りとその装飾について、研究と保存を車の両輪として学際的に進められているものである。⁽³⁰⁾ また、マーク・カービー編の論文集は、二〇一九年開催のシンポジウムに基づくものであり、ここではイングランドにおける宗教改革以降の内陣仕切りのあり方が多角的に論じられている。⁽³¹⁾ なお、こうした流れのなかで、基本文献とされる

オードリー・ベーカー（一九〇八―二〇一一年）の博士論文（一九三七年にロンドン大学コートールド美術研究所に提出したもの）は、現役の研究者の校訂・加筆を経て二〇一一年に出版された。⁽³²⁾

このような近年の諸研究は、内陣仕切りに関するきわめて広範かつ精緻な研究を成し遂げている。しかしながら、内陣仕切りの本質的な特徴や今日におけるその研究上の意義について、もつとも明晰かつ説得的な主張をおこなっているのは、アメリカ人の美術史家であるジャックリー・ヤングであるといえよう。⁽³³⁾ よって、以下ではその主張を要約しつつ紹介する。

彼女によると、内陣仕切りは先に触れたヴィオレ＝ル＝デュクらが見做すような「ゴシック聖堂において本来は意図されていなかった付加物」でもなければ「特権性を有する聖職者と一般信徒を分離するための障壁」でもなかった。まず空間的な観点から述べると、内陣仕切りは身廊で繰り広げられる様々な活動のための「輝かしくも適切な背景幕」^{バックドロップ}を構成するものであり、散漫になりがちな空間を凝縮させ、人々の視線を集中させる効果をもっていた。またそれは聖堂内における他の構築物と緊密に絡み合い、ある種の装飾プログラムを構成していたのである。したがって、内陣仕切りの分析は、その構造や装飾の様式などの基本的事項のみならず、それがどのように見られていたのか、すなわち「視覚性」^{ヴィジュアル・エスティマティヴ}の観点からもなされなければならない。そして「視覚」は、束の間に現れては消える「音」や「匂い」などの他の感覚や典礼における様々な動作と連動することで、「空間環境」を機能させ、それを意味あるものとしていたのである。

こうした点を踏まえると、内陣仕切りがもつとされる社会的な機能も、旧来の定説とはまったく異なるものであることがわかる。内陣仕切りの装飾は身廊側のみになされることが多く、さらに教区教会では有力な教区民がそこに自身の姿を描かせることもあった。こうしたことから、自分たちを聖域から排除しているはずの内陣仕切りが、一般信徒にとっての

一種の誇りであつたという矛盾した事實は、他の研究者も指摘している⁽³⁴⁾。しかし、ヤングは——少なくとも在俗教会である司教座聖堂において——聖職者たちは主祭壇に向き合ったり、プロセツション 祭礼行列で聖堂内を練り歩くことがあるため、彼ら自身も内陣仕切りの「観衆」あるいはその受益者であつたのだと主張する。もちろん、内陣仕切りには一般信徒の「隔離」や「排除」に関わる機能が存在していたことは確かである。だが、第四ラテラノ公会議（一二一五年）で明瞭となつたとされるその方針は、あくまで「一般信徒を統制しつつ、『母なる聖堂』マートル・エクレシアにより適切に統合する」というものであつた。したがって、内陣仕切りやその装飾物の社会的な機能を論じるのならば、対立やヒエラルキーではなく、コミュニケーションや持続性の視点から論じることが肝要なのである、と。

以上、ジャックリン・ヤングの主張を要約した。ポイントとなる点を繰り返すと、内陣仕切りはゴシック聖堂における「余計な付加物」などではなく、空間環境を構成・機能させるための欠くことのできない要素であつた。またそれは社会を分断するというよりは、（緊張関係を包含しつつも）統合するための装置であつたのだ。そしてその分析は、精緻な個別研究のみならず、時代・地域を幅広く見渡し、かつ学際的な視野でおこなう必要があるのである。その先に豊かな知見があることは疑う余地はないであらう。

おわりに

最後に、内陣仕切りに関わる学際的な成果について触れておこう。まず、前述のヤングも寄稿しているシャロン・ガーステル編『聖なるものの関かん』⁽³⁵⁾（二〇〇六年）を挙げる。これは古代ユダヤの神殿建築や東方教会のイコノスタシス（聖障）

を含めた聖域のための仕切りを扱った論文集である。また内陣仕切りに特化したものではないが、中近世のヨーロッパを扱ったスパイサー／ハルミトン編『聖なるものの輪郭』（二〇〇五年）と、ターナー／オーク編『中世ブリテン諸島における十字架』（二〇二〇年）にも示唆的な論考が多く掲載されている。⁽³⁶⁾「聖なるもの」または「聖なる空間」とそこにおける内陣仕切りの機能・役割は、現状においてもっとも有効な視座であるといえよう。

ただし、こうした学際的研究に困難な課題があることも事実である。多くの宗教施設で内陣仕切りがすでに失われていたり、大幅な改変を経ている点や、設置や破棄、評価に関する文書記録が乏しいなどの史料上の問題はもちろん存在する。しかし、ここでさらに指摘しておきたいのは、学問分野によって、内陣仕切りの研究蓄積や関心に大きな隔たりがあるということである。本稿で示した通り、欧米の建築史や美術史にはすでに十分な成果が存在し、またそれらは典礼学⁽³⁷⁾における近年の傾向とも親和性があると思われる。しかし、歴史学や宗教学、嗅覚の歴史や（筆者が関わる）音楽史⁽³⁸⁾においては、内陣仕切りはほとんど省みられていないといえる。こうした不均衡を解消し、各学問分野をどのように内陣仕切りの議論に接続していくかは、目下の最大の課題をいえるであろう。

学際的な研究は言うまでもなく、単一の研究者だけでなし得るものではなく、制度的・財政的な基盤のもとで多くの研究者が連携することが、そのための必須要件である。本稿がその一助となることを期待したい。

注

（一）この用語には邦語の表記のみならず、欧米諸語やラテン語の用法にも揺れがあり、しかもそこには内陣仕切りの本質的な問題が介在している。よって、用語自体の検討が必要となるが、紙幅の都合からそれは次稿でおこなうこととする。

(2) この主張の根拠として、トレント公会議（一五四五—一五六三年）における議論や決議が挙げられることが多い。しかしながら、そこでは内陣仕切りの問題について、議論は一切おこなわれていない。また「典礼への一般信徒の参加」という議題についても、その論点は自国語・俗語によるミサの実施と聖体拝領の問題（ホスチアの実際の受領）などに限定されていた。さらに、上記の二つの論点ですら検討段階では深い議論がおこなわれていたが、決議・教令においては旧来の伝統的な立場を堅持する文言のなかに滲み出る程度の扱いになってしまった。これについては以下を参照。Herman Schmidt, “Liturgie et langue vulgaire. Le problème de la langue liturgique chez les premiers Réformateurs et au Concile de Trente”, *Andelea Gregoriana*, 53 (1950), pp. 81-198. アントン・ジャンマーマン監修（浜寛五郎訳）『改訂版 デンツィンガー・シェーンメッツァー カトリック教会文書資料集——信経および信仰と道徳に関する定義集』エンデルレ書店、一九七四年、三〇七—三〇八頁（第二総会教令「犠牲としてのミサの祭儀について」の第六章と第八章。一五九二年）。周知のように、カトリック教会におけるこの保守性は、第二ヴァティカン公会議まで制度的に維持されていたが、思想面においてはトレント公会議以後まもなくして、一般信徒と聖職者の関係性をめぐる議論が発展したとされる。 Cf. Paul Lakeland, “The Laity”, in: Raymond F. Bulman and Frederick J. Parrella (eds.), *From Trent to Vatican II: Historical and Theological Investigations*, Oxford: Oxford UP, 2006, pp. 193-208, esp. pp. 196-197.

(3) 例えば、大貫隆ほか編『岩波キリスト教辞典』（岩波書店、二〇〇二年）には、「内陣仕切り」に該当する項目は存在しない（東方教会の「内陣障欄」と「イコノスタシス」はある）。新カトリック大事典編纂委員会編『新カトリック大事典』（研究社、一九九六—二〇〇九年）でも、その項目はわずかに数行に留まる。そして、以下のような専門的かつ大部な事典において、内陣仕切りの項目自体が存在しないことは象徴的といえる。ピーター・マレイ／リンダ・マレイ（中森義宗訳）『オックスフォード キリスト教美術・建築事典』（東信堂、二〇一三年）。

(4) 次のような代表的な概説書では内陣仕切りに関する記述はおおむね乏しく、たとえ言及されたとしても、それが肯定的な文脈であることはさわめて稀である。ジャン・ジェンペル（飯田喜四郎訳）『カテドラルを建てた人びと』鹿島出版社、一九六九年。デイヴィッド・ワトキン（白井秀和訳）『西洋建築史Ⅰ』中央公論美術出版、二〇一四年。

(5) 潮江宏三『イギリス中世後期の絵画——内陣仕切（rood screen）絵画を中心に——』『京都市立芸術大学美術学部研究紀要』四三号（一九九九年）、一〇一—一二三頁。木俣元一『ゴシックの視覚宇宙』名古屋大学出版会、二〇一三年、二五〇—二五五頁。太田由真『ナウムブルク大聖堂西内陣障壁の作品解釈』『メタプティヒアカ』、八号（二〇一四年）、一七一—二二頁。これらの諸研究も、内陣仕切りそのものを深く考察することはなく、その装飾の図像学的な分析に留まっている。

- (6) Viollet-le-Duc, “jubé”, *Dictionnaire raisonné de l'architecture française du XI^e au XVI^e siècle*, Paris: Réunions, 1856, vol. 6, p. 149. なお本稿における翻訳や傍点等の強調、角括弧による補足は、特に断りがない場合、すべて著者によるものである。
- (7) なお彼は、フランスの諸侯らが連名で司教権力による介入に反対した一二四六年十一月付けの証書を取り上げ、フランスの諸教会で内陣仕切りが現れるのはこの日付以降であると主張している。Viollet-le-Duc, “jubé”, p. 149; A. Tautel (ed), *Logettes du trésor des chartes*, Paris: Plon, 1866, vol. 2, p. 645 (no. 3569).
- (8) 二十世紀の著名な美術史家であるパウル・フランクル（一八七八—一九六二年）も、「聖職者は……祈禱を邪魔されないよう、平信徒を遠ざけておくためにある種の障壁を必要とした。ルードスクリーン（十字架付内陣仕切り）や内陣の側壁から分ける仕切りが発達したのは、この必要性からであった。……それらの背の高い仕切りは……当初意図された見通しのよさを損なわせた」とウィオレール・デュクと同じ主旨の内容を述べている。パウル・フランクル（佐藤達生・辻本敬子・飯田喜四郎訳）『ゴシック建築大成』中央公論美術出版、二〇一一年、六二〇頁（この引用文は上記の翻訳書に基づく）。
- (9) Jean-Baptiste Thiers, *Dissertations ecclésiastiques sur les principaux autels des églises, les jubés des églises. La clôture du chœur des églises*, Paris: Antoine Dezallier, 1688. 彼の生涯と著作の概要については、以下を参照。Louis Elies du Pin, *Nouvelle bibliothèque des auteurs ecclésiastiques*, vol. 18, Amsterdam: Pierre Humbert, 1711, pp. 273-284, esp. pp. 278-279.
- (10) Thiers, *Dissertations ecclésiastiques*, Preface (no pages).
- (11) こうした地方史研究の事例として、次の一点を紹介する。Achille Durieux, “Le jubé de l'église Saint-Aubert de Cambrai”, *Mémoires de la Société d'Émulation de Cambrai*, 56 (1891), pp. 54-75. この論文は、カンブレールのサン・ジュリエ教会（旧サン・トベール修道院）の内陣仕切りを扱ったものだが、その著者はアシル・デュリユー（一八二六—一八九二年）という人物である。彼はカンブレールに生まれ、高等教育を修めた後、同市の諸学校における美術教師や文書館・美術館の学芸員を務め、退職後も同市の文化行政に深く関わった。その関心は美術史に留まらずカンブレールの地方史全般におよび、著作（展覧会のカタログを含む）の一点、論文は約六〇点を数えつゝ。Cf. Véronique Dumas, “Durieux, Achille”, *Dictionnaire critique des historiens de l'art actifs en France de la Révolution à la Première Guerre mondiale* (<https://www.inha.fr/>) (二〇二四年十一月十七日最終閲覧)
- (12) 本稿では、中世または一七〇七年より前の時代のブリテン諸島の諸地域について言及する際、便宜的に「イギリス」という言葉を使用することがある。
- (13) Augustus Pugin, *A Treatise on Chancel Screens and Rood Lofts, their Antiquity, Use, and Symbolic Signification*, London: Charles Dolman, 1851.

- (14) Pugin, *A Treatise on Chancel Screens*, p. 1.
- (15) Pugin, *A Treatise on Chancel Screens*, pp. 98-99. なお、ハッデビュージンが「ウェストミンスター」と呼んでいる施設が具体的に何なのかは不明である。まず、現行のウェストミンスター大聖堂は十九世紀末の建造（献堂式は一九〇三年）であり、彼の時代にはまだ存在していない。よってウェストミンスター寺院の可能性が高いが、「薄暗い九天井や新しい内陣仕切りの忌々しき列柱」*gloomy vaulting of Westminster and the odious pillars of a new rood screen* という表現と、同教会の実際のあり方に解離がみられるように思える。同教会の内陣仕切りについては複雑な歴史があるので、関連する事項のみ述べる。十八世紀においてウェストミンスター寺院の内陣仕切りは石造であったが、同教会の建築技師を務めていたヘンリー・キーン（一七二六—一七七六年）のもとで、一七七五年に木造（オーク製）のものに建て替えられた。そして十九世紀半ば（一八四八年頃）になると、それはエドワード・ブローア（一七八七—一八七九年）の設計による現行の内陣仕切りに置き換えられた。しかし、後者の形状に「忌々しき列柱／鉄柵」を見出すことは困難に思える。Cf. Lawrence Tanner, *Westminster Abbey*, London: Pitkin Pictorials, 1965, p. 12. 他の候補としては、ウェストミンスターにあるセント・マーガレット教会が挙げられる。この教会には一五一九年に多額の費用を投じて内陣仕切りが設置されていたが、一五五九年にはバルコニー部分に据えられた十字架が撤去され、内陣仕切り自体も「改革」を余儀なくされたという。
- (16) Cf. George Smith et al. (eds.), *The Dictionary of National Biography*, Oxford: Oxford UP, 1917, vol. 16, pp. 449-453, esp. p. 450. D・ワトキン（桐敷真次郎訳）『建築史学の興隆』中央公論美術出版、一九九三年、一四〇—一四二頁。ビュージンにおいて、カトリック信仰とゴシック芸術は分ち難い関係にあり、後者の復興は彼にとつていわば天命であったという。
- (17) Francis Bond, *Screens and Galleries in English Churches*, Oxford: Henry Frowde, 1908. 建築史学におけるフランシス・ボンドの位置づけについては、ワトキン『建築史学の興隆』二二〇—二二三頁を参照。
- (18) Frederick Bligh Bond and Bde Cunn, *Roodcreens and Roodlifts*, 2 vols., London: Isaac Pitman, 1909. ちなみに、「ボンド」という名をもつ二人の研究者がほぼ同時期に同じテーマで書籍を刊行したことについては、本書の冒頭でも触れられている。二人は親しい友人であるが、血縁関係もない別人である。また両者の研究には似た面があるが、それはまったくの偶然であったという。
- (19) Aymer Vallance, *English Church Screens*, London: B. T. Batsford, 1936. id., *Greater English Church Screens*, London: B. T. Batsford, 1947.
- (20) 中世末期のイギリスでは、(大) 司教座聖堂は約三〇、教区教会は約八五〇〇—一二〇〇〇、修道院は約五〇〇を数え、それに加え無数の参事会聖堂や寄進礼拝堂（チャントリー・チャペル）が存在していた。これに関する概説としては、以下を参照。ラルフ・グリフィス（北野かほる監訳）『オックスフォードブリテン諸島の歴史』十四・十五世紀』慶應義塾大学出版会、二〇〇九年、

一五九—二一六頁。Norman Pounds, *A History of the English Parish: The Culture of Religion from Augustine to Victoria*, Cambridge: Cambridge UP, 2000.

- (21) また彼らの成果は、以下のような小著ながらも要を得た書籍に活かされているといえる。Richard Hayman, *Rood Screens*, Oxford: Bloomsbury, 2018.

- (22) これに関連して、フランスでは興味深いことに、建築史・美術史以外の研究者が内陣仕切りに関する優れた業績を遺している。すなわち、内陣仕切りの名称の問題や中世から十九世紀にかけてのその概略を丁寧に関観する論考を著したジュールジュ・セルヴィエールは、音楽学者・批評家であった。Georges Servières, “Les jubés (origine, architecture, décoration, démolition)”, *Gazette des beaux-arts: le doyme des revues d'art*, N/A (1918), pp. 355-380, N/A (1919), pp. 77-100. また、ジャン・マリオンはシャルトル大聖堂の内陣仕切りに関する大部な書籍を出版したが、彼の専門は文学（ヴィクトル・ユーゴー）であり、この書籍はいわば副専攻として書かれた大学教授資格論文に基づいたものであった。Jean Mallion, *Le jubé de la cathédrale de Chartres*, Chartres: Société Archéologique d'Eure-et-Loir, 1964.

- (23) Jan Steppe, *Het Koortoksaal in de Nederlanden*, Leuven: Universiteitsbibliotheek, 1952.

- (24) Steppe, *Het Koortoksaal*, pp. 417-424.

- (25) Marcia Hall, “The Ponte in S. Maria Novella: The Problem of the Rood Screen in Italy”, *Journal of the Warburg and Courtauld Institutes*, 37 (1974), pp. 157-173; ed., “The Tramezzo in Santa Croce, Florence, Reconstructed”, *The Art Bulletin*, 56/3 (1974), pp. 325-341; ed., “The Italian Rood Screen: Some Implications for Liturgy and Function”, in: Sergio Bertelli and Gloria Ramakus (eds.), *Essays presented to Myron P. Gilmore, Volume II: History of Art. History of Music*, Florence: La Nuova Italia Editrice, pp. 213-218.

- (26) Klaus Gamber, “Der gotische Lettner: Sein Aussehen und seine liturgische Funktion aufgezeigt an zwei typischen Beispielen”, *Das Münster*, 37 (1984), pp. 197-201. ガンバーは教皇バウロ六世（位一九六三—一九七八年）のもとでおこなわれた典礼改革に対して否定的であり、その著作は教皇ベネディクト十六世（位二〇〇五—二〇一三年）による自発教令「スンモールム・ポンティフィカム」（二〇〇七年）——ラテン語による典礼を再評価し、その実践を奨励するもの——に影響を与えたとされる。

- (27) Gamber, “Der gotische Lettner”, p. 198.

- (28) Monika Schmelzer, *Der mittelalterliche Lettner im deutschsprachigen Raum: Typologie und Funktion*, Petersberg: Michael Imhof, 2004.

- (29) Mathieu Lours, *L'autre temps des cathédrales: Du concile de Trente à la Révolution française*, Paris: Picard, 2010.

- (30) East Anglian Rood Screen Project (<https://www.hki.fitzmuseum.cam.ac.uk/projects/roodscreens> : 二〇二四年十一月二二日最終閲覧) なお、このプロジェクトの実質的な運営は、ハミルトン・カー研究院の上席学芸員であるルーシー・ラフソン氏が担っている。
- (31) Mark Kirby (eds.), *Chance! Screens since the Reformation*, London: The Ecclesiological Society, 2020.
- (32) Audrey Baker (Ann Ballanlyne and Pauline Plummer, eds.), *English Panel Painting 1400-1558: A Survey of Figure Paintings on East Anglian Rood Screens*, London: Archetype, 2011.
- (33) Jacqueline Jung, "Beyond the Barrier: The Unifying Role of the Choir Screen in Gothic Churches", *The Art Bulletin*, 82 (2000), pp. 622-657; ead., "Seeing through Screens: The Gothic Choir Enclosure as Frame", in: Sharon Gerstel (eds.), *Thresholds of the Sacred: Architectural, Art Historical, Liturgical and Theological Perspectives on Religious Screens, East and West*, Washington, D.C.: Dumbarton Oaks, 2006, pp. 185-213; ead., *The Gothic Screen: Space, Sculpture, and Community in the Cathedrals of France and Germany, ca. 1200-1400*, Cambridge: Cambridge UP, 2013. 特に断りになす限り、以下の記述は Jung, *The Gothic Screen*, pp. 1-7 に基づく。
- (34) Cf. Baker, *English Panel Paintings*, pp. 6-7, 215-229.
- (35) Gerstel, *Thresholds of the Sacred*. (注三三を参照)
- (36) Andrew Spicer and Sarah Hamilton (eds.), *Defining the Holy: Sacred Space in Medieval and Early Modern Europe*, Aldershot: Ashgate, 2005; Philippa Turner and Jane Hawkes (eds.), *The Rood in Medieval Britain and Ireland c. 800-c. 1500*, Woodbridge: Boydell, 2020.
- (37) 近年の典礼研究においては、礼拝のテキストや式次第のみならず、それがいかなる空間環境で上演され、どのような機能や効果をもっていたのかが注目されている。そうした視角からなされた優れた成果として、この二つは以下のものを挙げておく。Eric Palazzo, "Art, Liturgy and the Five Senses in the Early Middle Ages", *Viator*, 41/1 (2010), pp. 25-56; Philippe Martin, *Le théâtre divin: une histoire de la messe XI^e-XX^e siècles*, Paris: CNRS, 2010; Helen Gittos, *Liturgy, Architecture, and Sacred Places in Anglo-Saxon England*, Oxford: Oxford UP, 2013.
- (38) キリスト教の典礼における「匂い」の問題を扱った珍しい研究としては、以下のものが挙げられる。Jean-Louis Benoît, "Autour de l'odeur de sainteté, les parfums dans le monde chrétien", *Iris*, 33 (2012), pp. 55-89. また、欧州連合の資金提供のフェビティエヴァ大学のブレイン・イカ・ムラ氏が率いる研究プロジェクトは、中世ヨーロッパにおける聖観念の感覚的側面をテーマとしていっている。The Sensuous Appeal of the Holy. Sensory Agency of Sacred Art and Somatised Spiritual Experience in Medieval Europe (12th-15th century) (<https://sensartproject.eu/> : 二〇二四年十一月二二日最終閲覧)

- (39) 中近世ヨーロッパの音楽史研究において、内陣仕切りはほとんど検討されていないといえる。しかしながら、教会音楽の演奏実践を調査している研究者にとつて、その存在はよく知られたものであり、貴重な成果もすでに存在する。例えば、アン・ウォルターズ・ロバートソンは、ギヨーム・ド・マシヨンの著名な《ノートルダム・ミサ曲》が、ランス大聖堂の内陣仕切り付近でこなわれていた私的聖務のために作曲されたと主張している。Robertson, Anne Walters, *Guillaume de Machaut and Reims: Context and Meaning in his Musical Works*, Cambridge: Cambridge UP, 2003, pp. 257-275.

※本稿は、JSPS科研費・基盤研究(C)「『グレゴリオ聖歌』の成立状況に関する学際的・史料論的検討」(課題番号: 222LKK00131、研究代表者: 山本成生)ならびに慶應義塾大学言語文化研究所公募研究「精神史における『言語』と『空間』をめぐる創造的営為と表象」(二〇二四—二〇二六年、研究代表者: 鎌田由美子准教授)による研究成果の一部である。

